
東方崩天歌

皿舵 ツナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方崩天歌

【NZコード】

N9948X

【作者名】

皿舵 ツナ

【あらすじ】

幻想郷に一ヶ月前に幻想入りした神界の住人。

この物語は神界の住人と幻想郷の住人が織り成す幻想郷ではいつも
の日常……なのか？

崩天歌ノ一『天使』

「目は覚めたかしら？小さな小さな天使さん？」

目覚めた私の前に立ちはだかつたのは傘と扇子を持った金髪の美女だった。

「…………ここをどこだか知つての行いですか？」

「ええ……用があるのはこの扉ではない、用があるのは貴方よ。」

「…………私？」

長い沈黙。長い睨み合い。

どうして私に用があるのか分からぬ。こんな出来損ないの私に。その金髪の人は私に微笑みながりこう言つた。

「幻想郷に来ない？」

その言葉が私の人生を180度大きく変えたのかもしけれない。

この話は出来損ないの天使と幻想郷の住民が織り成す不思議な不思議な物語。

妖怪の山の裏に存在する中庸の道。ここには死者生者問わず通る道だ。

一ヶ月前にここに扉ごと引っ越してきた私こと天道てんどう 許斐はいつこのみも通り扉の番をしていた。

私がいま守っている扉は天門と呼ばれる扉で天使の住む天界と幻想郷を繋ぐ唯一の扉だ。

それを守っている私も天使で、さらに位階が低い天使を纏める班長なのが……一身上の都合で同僚からの信頼も無く、さらに全ての天使を纏める長も私との接触となるべく避けている。しかし私自身はそんなに気にしてはいない。特に幻想郷に来てからは。

「班長」交代の時間ですよ。」

妖怪の山から人影が一つ見える。声の主は聞き慣れた後輩の声であつた。

桃園ももざわ 涩かいり。私の班に所属している後輩天使。年は150歳。(天使の中ではまだ若い。)紺色の短い髪に黒い瞳の少し幼い風貌が印象の元気な子だ。

「渉。もう交代でいいの？」

「班長こそもう三日も休んでいないじゃないですか。あとは任せて下さい。」

と渉は無い胸（揺れない震源地）を張った。

「ならお言葉に甘えて……そちらの方は？」

私は和服を着た短い髪の少女へ目を向ける

「稗田 阿求さん。人間です。なんでも一度班長に会つてみたいだとか。」

「初めてまして、私は天道 許斐です。」

「こちらこそ始めまして。稗田 阿求と申します。今回は神界や天使達について詳しくお聞きしたいのですが……お時間の方は大丈夫ですか？」

「えっと……涙！？」

「大丈夫です班長。神様もいませんし、五田は休めるはずですから。ゆっくりしていって下さい！」

「ありがとうございます。それでは阿求さん。手間をおかけしますが、説明がてら人里に行きたいので人里に行つてもよろしいでしょうか？」

「いいですよ。急に押しかけてきたのは私の方ですから。」

と阿求は深々と頭を下げる。それにつられて私もつい頭を下げてしまつた。

それを見て涙はクスクスと笑う。

「では少々不安定な空の旅になりますが、ご同行を。」

と言つて私は阿求さんをお姫様抱つこの様に抱いた。

「……涙さんといい貴方といい……天使とはこのよつた大胆なもので？」

「この方が私達にとつて飛びやすいんです。」

私はそう言つと大きな翼を広げ、春の麗らかな空へと飛び立つた。いい飛行日和だ。

私と阿求さんは人里の門の前に降り立ち門を通り抜ける。人里は今日も人間やら人妖やらで賑わっていた。

食事をするだけなら中庸の道の屋台でも出来るのだが、あそこ

屋台は地獄に行くぐらいの犯罪者が経営していると聞く。

いくら祭好きの人間が行くとはいっても滅多に行かない。人里の方がゆっくりと食事が出来るし、里の人達は新参者の私でも皆親切にしてくれるからだ。

「折角ですから食事でもどうですか？私は狸さんと食べてきたので貴方だけになりますが……情報提供のお礼ということで。」「ではお言葉に甘えましょう。」

そんな事を話しながら私と阿求さんは歩を進めて行く。もちろんの事だろうが羽はしまってある。通行人の邪魔だからだ。しばらく人里の人混みを掻き分けて行くと、大きな屋敷の前に着いた。

「ここが阿求さんの屋敷で？」

「そうです。では案内しましょう。」

私はお邪魔しますと言い、屋敷の門をくぐる。

大きな庭を歩き、屋敷の中へと入る。屋敷の中には使用人と思われる人とすれ違った。こんなに大きな屋敷なのだから当然だろう。そして辿り着いたのは畳が敷いてある和風な客間であった。

「食事は使用人が持つてきますので少々お待ちを。では質問しますがよろしいですか？」

阿求さんは私と対面するようにちょこんと座った。

「私の話せる範囲であれば何なりと。」

「まずは神界とはなんですか？」

「神の住む世界、言葉のまんまです。神様が作り、そこに住んでいればそこは神界と言えます。」

「神界にいる神様は一人で？」

「大体は、ただし二人や三人の場合も稀にありますね。」

「では次に天使の事についてですが……まず制服はその白いワンピースなんですか？狸さんも着てましたし。」

「そうですね。でも私達全員を纏める天使長や神様の秘書だとかは自由な服装ですね。」

「天使の寿命は？」

「ありません。ただ寿命が無くとも滅びはします。特定の条件下のみでですが、それは機密事項です。」

「最後は羽についてお願ひします。」

「羽は自由に生やしたりしまつことも出来ます。一応人一人持つて飛べるぐらいの力があります。」

私が説明し終わると阿求は一息ついた。

「大体こんなものですかね……ありがとうございました。」

「でもいいんですか？メモもとらずに。」

「記憶力だけはいいんですよ。」

阿求は苦笑するように笑う。

私もつられて苦笑していると、使用人らしき初老の男が料理を運んできた。

「では、いただきますね。」

「お構いなく。」

私は遅い昼ご飯にありつくのであった。

「それにもこんなにも口外していいものなんですか？貴方達の世界の事を。」

「大丈夫ですよ。こんな時の為に神様から許可は出ていますから。」

「それで貴方の神様は今何処に？」

「多分マヨヒガです。紫様が住んでいる。」

「て事は貴方は八雲 紫に面識が？」

「神界で初めて会ったのは多分私ですから。」

「正確には神界への扉の前で、なのだが。」

「ふむ、様付けしているのを見ますと随分とお世話になつたようですね？」

「ええ……それは色々とですが。」

私は溜め息をつきながら言った。

「相当苦労なさっているようで。」

「はい。私が仕えている方も天真爛漫な方で……紫様と同じくらい

に手を焼くぐらいですね。」

私は箸を置き、じつとままでした。と言つと阿求もお粗末さまでした。と頭を下げる。

「許斐さんはこの後どうなさるんですか?」

「近くの居酒屋に行きます。神様の友人が経営している店です。」

「そうですか。では道中気をつけて。」

と言い頭を下げる阿求。それに対しても頭を下げる。傍から見れば頭を下げすぎだと言われても仕方ないくらいだ。

「それではお邪魔しました。」

私は稗田邸を後にして目的の居酒屋へと歩を進めて行くのだった。

崩天歌ノ一『天使の昔話』

しばらく人里を歩いて5分……私は行きつけの居酒屋の前に辿り着いた。

看板には『居酒屋 武士道』と書かれている。

確かにこの店の女将は戦国時代の戦乱の中を生きていたと話していた。

今は亡靈として幻想郷に腰を据えているのだが……。

店の引き戸を引くと、厨間ながらまるで宴のように客達は酒を呑んでいた。

私がたちつくしていると、目的の人物に話しかけられた。

「あら、許斐ちゃん。いらっしゃい。」

「こんなにちは葵さん。」「
葵 くわい 吳葉 くわは。

『居酒屋 武士道』の女将でとても気前のいい人。神様も一日置いていて、よく紫様とここに呑みに来ている。

「ふふ……やつとお暇が取れたようだ。」

「はい、一週間振りでしようかね？」

と言つて私は吳葉さんの目の前の席に座る。

ちなみに吳葉さんの前の席に座る=一夜越し確定というのが常連客の中での習わしとしているらしい。

「いいの? こんな厨間から私の前に座つて。」

「はい……葵さんと話したい気分でしたから。」

「ならゆつぐりとしていくといいわ。許斐ちゃんも常連客になりつつあるわね。」

葵さんは微笑みながらお酒を注いでいる。

葵さんは赤い瞳を持つ美しい顔立ちもそうだが、長い黒髪とボンツキユツボンツな体型を持つまさに極上の美人というべきお方である。

黒髪は後ろで結んでおり、前髪は右目を隠すように分けている。それがまた堪らないらしい（常連客のスケさん談）。

また体型に関するところから見る限りでは胸はかなり大きい。また立つた時に見たその体型はまさに理想ナイズバディと言つに相応しいと言われる（常連客のカクさん談）。

私が葵さんをジロジロ見ていると、葵さんは悪戯な笑みを浮かべて、あら？ そんなにこの胸が気になるの？ と茶化してきた。

「それは………… そうですよ。 同性の私から見ても葵さんは魅力的ですしちゃん！」

「そう？ 私は重くて動きにくく」と常々思うんだけどね。」「

葵さんはそう言つているが、それでも私はその体型に憧れを持つていた。

常連客も葵さん田口で来る者も多い。まあ、葵さんと話すなら一夜越しさは覚悟しなければならないのだが。

「許斐ちゃんもその内に大きくなるわ。」

そう言いつつ葵さんは德利を私の田の前に出す。

「1000年以上も生きているのにこの先大きくなるんですかねえ……。」

私はそう言いつつおちょこにお酒を注いで一口飲んだ。

「そういえば後ろの大きな刀はなんですか？」

「これの事かしら？」

葵さんは後ろにおいてある刃渡り5尺になるだらう刀を手に取る。「この刀は私の父から譲り受けた私の宝物よ。今でもこの切れ味は落ちてないわ。」

そう言つて葵さんは刀を抱き抱えた。

「ではやはり剣の腕も相当では？」

「いや、私は刀に少し頼り過ぎな面があるから…… それほどでもないわ。」

「そんなことはないわ~。 妖夢の稽古をつけてくれたぐらいだもの。」

ふと私の横から女性の声が聞こえた。

「ゆつ、幽々子様つ！？驚かせないで下せい……！」

そこには白玉楼の主、西行寺 幽々子が平然と私の隣に座つてい
た。

「私ならつにわたりましたわよ？貴方がこの店に入つた時からね。

」

全く気づいてなかつた……。

「いらっしゃい幽々子。一晩いけるの？」

「たまには言葉と話したいものよ。」

「それは嬉しいわね。」葵さんは嬉しそうに笑みを浮かべた。
葵さんは接客にも定評があり、リピーターも多いと言われる。
ちなみに私もその一人になるつもりだ。

「そういえば紫も彼の慈母神様と来るよつだし。あ、焼鳥五皿と焼
酎一本。」

「えつ…………？」

私は慈母神という言葉に思わず手に持つていたおちょこを落とし
そうになつた。

「幽々子様…………一つ確認したいことが…………」

「何かしら～？」

「神様が来るつて本当ですか…………？」

「ええ、今日は自慢の天使が休暇で来るはずだから藍を連れてどう
かしら～つて。」

私は頃垂れて机に突っ伏す。

「の方は…………職務もほつたらかしにしておいて…………。」

「あらあら～？何かあつたのかしら？」

幽々子様が興味を持つたように聞いてきた。

「あの人は…………この幻想郷に来てから職務をほつたらかしにしてぶ
らぶらこの世界を歩き回つてているんですよ…………。」

私は机に突っ伏したまま言った。

「でも紫達の話を聞くよつだと職務は一遍にやつているよつだし、

問題ないと思うのだけれど?」

「確かに書類などの職務はそうですが……さすがに他の神が来て話をするような社交的な職務となると……私達は下っ端ですし。」

「でも以前は仕事をこなしていたんでしょ? ストレスが溜まつていんじゃない?」

「それはそうですけれども……度が過ぎます。」

私は空になつた徳利を葵さんに差し出す。

葵さんは徳利を受け取ると次の徳利を私の前に差し出した。

「……確かに私が羽を伸ばしてきて下さい、って言つたんですけどもね。私から見ても働きすぎだつてくらいですから。」

「休むという事を知らなかつたつて事ね。」

「神様つて以外なところで厄介なんです。疲れ知らずですから24時間ずっと書斎に籠つていたつて時もありましたし、他の神様に会う為に一週間神界からいなくなるつて事もありました。話すと長くなるので省きますが、ともかく慈母神としての自覚を持つてからは職務に忠実になつてしまつて……。」

「でも何故貴方は幻想郷に来てからカミサマに羽を伸ばせつて言ったのかしら?」

「人々に忘れられたからです。」

「忘れられた?」

「正直な話、慈母神としては今の神様より前のイザナミ様の方が有名でした。イザナミ様の死後は今の私が仕えている神様なんですが……どんなに頑張ろうともイザナミ様には遠く及ばなかつた。」

「それで段々と信仰が無くなつて?」

「はい、特にキリスト教が大きく普及してきた時は特に。その時から神様は薄々と忘れ去られたと悟つてきたのです。しかし、忘れ去られてきたとしても慈母神としての力をイザナミ様の祀る神社に与え続けてきました。それは慈母神としての使命かそれとも自身の意志か。私には後者だと思いますが。」

私は一口お酒を飲む。

「そして紫様が私達の下に来ました。幻想郷に来ないかって。最初は私も神様も反対しましたが、ふとこの言葉が私の頭に突き刺さつたんです。幻想郷は来るもの拒まず、例え天使だらうが忘れ去られた神だともね、と。その時に私は自覚しました。忘れ去られたんだなあつて。本当は神様自身も分かつていた事なんですが私がこう言ったんです。もう私達がいなくともやつていける、私達がやれることはやつてきた、後は他の神様に任せようつて。その言葉で神様も了承してくれました。それで今に至ります。」

私は話を終えてもう一口お酒を飲む。

「忘れ去られた、か。」

幽々子様は感慨深くそう言つた。

「はい……私達は1000年以上も渡つてやつて来ましたが……限界だつたようです。」

「でも1000年やつてきたのなら頑張つたんじやない？」

「でも…………。」

「涙……拭きなさいな。十分誇れる事よ。」

幽々子様に指摘されて泣いている事に気付いた。

私は葵さんからおしごりを貰つて涙を拭く。

「許斐ちゃん。貴方の神様は忘れ去られながらも前代のイザナミ様のご意思を汲んで1000年以上もイザナミ様の力を護り続けた。それつて偉大な事よ？自分の信仰を気にかけず、前代の信仰を護つていたのだから。」

「そう言われてみると神様は気にしていませんでした。自分の信仰の事を。」

私は苦笑を浮かべる。

「ところで……許斐ちゃん？」

「なんしょうか？葵さん。」

「天使つて元々はキリスト教の神に仕えるものだと聞いた事があるんだけども……何故貴方は日本の神様に？」

「それは5世紀に一度キリスト教が伝えられたからです。私達はキ

リスト教が伝わるのに合わせて日本に派遣されました。神様は私達を見てすぐに気に入ってくれました。その時から私達は仕えています。」

「不思議な話ね……日本の神に西洋の神の使いが仕えているなんて。」

「ええ、今思うと私も不思議で仕方ありません。」

私は笑みをこぼす。

葵さんは私が笑みを浮かべたのを見ると

「さて、しんみりとした話はおしまい。後は楽しくお酒を呑んでいいつてね。」

「…………はい。」

私は元気よく返事を返した。

崩天歌ノ一『天使の昔話』（後書き）

一話、二話共に説明回になってしまったと今更ながら後悔。

稚拙な文章ですがこれからもよろしくお願いします。

崩天歌ノ三『世間話と夢』

私が話を終えた後は幽々子様と葵さんの会話が続いたのだった。その話の内容は世間話から白玉楼の庭師である魂魄 妖夢の事まで様々な話だつた。

まあ三割は庭師についてだつたのだが……。

「それが結構すばしつこくて捕まらないのよ~。」

「ちょっと待つて幽々子。彼女は確か八日鰻の屋台をやつていたはず、なら私の下で働かせてみたいわ。食べるのには私は贊同しないわね。」

「え~。なら働くにたなかつたら私が食べるといつ事で……。」

「それならいいわ。」

どうやら一人とも夜雀の事を話しているようだ……せめて捕まらない事を祈ろう。

そういうえば客が増えてきた気がする。隣の幽々子様の皿も増えているが……それぐらい増えている。いや、幽々子様の皿の方が多いか。

店員も忙しそうに急ぎ回っていた。

ちなみに店主も亡靈なら店員も亡靈。人間もいるが、亡靈の方が多いと聞いた事がある。

この賑わいだともう日が落ちかけているだろう。

「そろそろ来るんじゃないかしら~。」

幽々子様はお酒を一口、もう何本目か分からぬ焼き鳥を一本食べながら言い、後ろを向いた。

私も後ろを向く。

すると、目の前に大きなスキマが広がった。

このスキマは間違いなく何度も見ているものだ。

「幽々子、葵、待たせたわね。」

田の前のスキマからは扇子をもつた金髪の美女——ハ雲 紫が出てきた。

「——のスキマ……いつ見ても不気味よね……便利だからいいけどもれ。」

その後に続いて赤髪の長髪と小柄な体型を持つた見慣れた方が出でてくる。

「——のみ～ん。休暇は楽しんでる?」

間延びした声で私をあだ名で呼んでるのが私の仕えている神様、出雲 魅歌様。

更に魅歌様の後には紫様の式である藍ちゃんの姿もあった。

「三人ともいらっしゃい。三日振りかしり?」

「そうね。その時は藍がいなかつたんだけど。」

紫様が答える。

「お久しぶりです。」

私は紫様と目が合い、挨拶をする。

「あら、魅歌が言つていた自慢の天使つて……。」

「そう、泣く子も黙るこのみんよ。」

魅歌様は無い胸（涙といい勝負が出来るだろう）を張る。

「今までどこほつつき回つていたんですか?——ちは山の神様やら秋の神様やら厄神様やらの対応に追われて……」

「ああ、それなら他の天使から連絡受けて紫のスキマでひとつ走り行つてきた。もう心配ないと思う。」

私は色々な意味で溜め息をついてしまう。

なんでこう魅歌様つてなんでも器用に利用して物事を進められるのだろうと常々思つてしまつ。

これなら職務は完璧だ。だが……

「神様がいない時の天使への指示はどうするんです?天使長も慌てていましたし。」

「それなら紫のスキマ使って戻つて指示出しておいた。ついでにお金も持つてきたし……思つ存分呑みなさいな。」

「またスキマ使つたんですか！！」

私が指摘する中、紫様がまあまと私を抑える。

「私としては神界に行けたし、魅歌が幻想郷に馴染んできているか確かめられたから問題ないわ。」

その紫様の言葉に私は渋々引き下がる。

「ウチの神様がご迷惑をおかけして申し訳ありません。」

「いやいや、気にする事はないよ。紫様の方こそ神界の方にお邪魔してしまったようで。」

私は魅歌様の変わりに藍さんに謝つておく。

藍さんは全く気にしていないようで逆に頭を下げられてしまった。

「あれ？ 幽々子んとこの庭師は来ないの？」

魅歌様が気分よくお酒を一口呑みながら言つた。

「妖夢なら紅白にお呼ばれされてるわ～。刀の事で色々と聞きたい事があるんだって。」

「紅白？……ああ、紫も話していた博麗 靈夢の事か。」

博麗 靈夢……私も話だけは聞いた事がある。

妖怪退治を生業とし、異変が起きた際は必ずと言つていゝ程博麗 靈夢が解決に行く。そして異変に立ち塞がる者は誰であろうが容赦しないという幻想郷では多分1番有名な巫女。と涙が話していた。「でも靈夢が刀に興味を持つなんてねえ……。」

「確かにあの靈夢が興味を持つのは珍しいですよね。」

八雲の主従が口々にそう言つた。

でも私の頭の中にはある疑問が浮かんでいた。

「でも刀の事なら葵さんの方が知識が豊富なのでは？」

「私はそんなに詳しくはないわ。」

私はがっくりと肩を落とす。

そんな私の姿を見てから葵さんはでもね……と話を続ける。

「刀に関してはあまり関係ないかもしねないわ。」

「それはまた何故？」

「確かに、風の噂では辻斬りが出没しているんだとか。」

「

葵さんがそう言つた瞬間に幽々子様があらあらあらーと驚いたよう

に声を上げる。

「まさか妖夢が？確かにあの子は半人前だし侵入者は容赦なく斬る不届き者だけれども。」

「さりげなく酷い事言つているわね……。」

幽々子様の言葉に魅歌様がツッコミを入れる。

「でも妖夢がやる訳ないわ。最近は外出もしてなかつたし。」

「どうやら違うみたいね。」

幽々子様の言動を読み取つたのか紫様がそう言つた。

「葵さんはほとんど店にいるし……じゃあ誰が？」

と藍さんが疑問を投げ掛けた。

すると紫様が急に笑みを浮かべる。

「……多分外来人じやないかしら？」

「「外来人？」」

私と魅歌様が揃つて頭の上に疑問符を浮かべる。

「今までに辻斬りなんていなかつたもの、外から來たと考えるのが普通だわ。妖夢でもなさそうだし。」「む。紫まで疑つていたのね。」

少しだけ幽々子様は頬を膨らませる。

「でも靈夢が妖夢を疑つているのには興味があるわね。魅歌、幽々子、行つてみない？」

笑みを扇子で隠しながら紫様は言つた。

「そうね、妖夢がどうしているか気になるし。」

「いいねいいね！靈夢つて巫女も気になるし。」

幽々子は少し心配そうに、そして魅歌様は楽しげにそう言つた。

「私は辻斬りつてのが気になるから少し調べてみるよ。おーい、少し店を出るよ？」

葵さんは愛刀を手に店員の亡靈にそう言つた。

「もちろんこのみんも来るよね？休暇中だけど仕事じやないし。」

「どうやら一夜越しは出来なさそうだ。」

「 私なら魅歌様の行くところ何処へでもお供します！」

「 んもう……そんなかたつ苦しいことは言わず素直に行くと言えればいいの。」

私の頭をポカッと魅歌様が叩く。

「 それじゃあ、行つてみましょつか？」

そう紫様が言い、私達は勘定を済ませる。

そして私、魅歌様、紫様、幽々子様、藍さんは紫様のスキマに入るのであつた。

崩天歌ノ四『博麗神社』

私達が靈夢といつ巫女が住む神社についた時には日が落ちている状態であった。

スキマが開いたその先は玄関だったので靴を脱ぎ、巫女がいるであろう居室へと向かう。

そしてそこにいたのは紅白で腋がの部分がさらけ出ている巫女服を着た黒髪の少女と銀髪で緑色の服装をしている少女がいた。

銀髪の少女の隣では半透明で丸い物が浮かんでいる。

「なによ紫。何か用？」

紅白の少女が不機嫌そうに言った。

「いやいや、うちの妖夢に辻斬りの疑いをかけているようだから様子見にきたのよ。」

幽々子様が紫様の代わりにそう言った。

「はあ？ 辻斬りなんて疑いかけてないわよ。てか何よこの顔ぶれは……アンタと紫にその式、それと…………誰？」

「最近幻想郷に来た慈母神の出雲 魅歌。お初目にかかるわ、博麗靈夢。」

「初めてまして、私は魅歌様の部下の天道 許斐と申します。よろしくお願ひします。」

私と魅歌様は挨拶をするが靈夢はそれだけ聞くと興味が無いように私達から視線を外す。

それに対しても魅歌様は少しムツとしたようだがなんとか抑えたようだ。

「それで？ 妖夢にはなんの用が？」

紫様が言った。

「辻斬りが現れたってのは知っているみたいだから辻斬りの説明を省くけども、アリスがやられたわ。」

「あの人形使いが？」

紫様が驚いた様子もなく答える。

「アリスの目撃情報だと髪は白髪で刀を持っていたと聞いているわ。

「ほら、疑つてんじゃない。」

幽々子様が靈夢に対してもし憎つたらしい様子で言つた。

「だからもう疑つてないっての。この庭師から事情は聞いたから。」

靈夢は幽々子様をキッと睨む。

「そもそも庭師を疑つていたのはもしかしたらの話だったのよ。目撃情報と妖夢とじゃ矛盾があつたんだから。」

「矛盾?」

「そもそも庭師の髪つて白髪というよりも銀髪でしょ?それに目撃者はなにもアリスだけではないもの。他にも目撲情報があつて犯人はその庭師かどうか分からなかつたの。でも念のために聞いておこうと思つて呼び出したの。」

靈夢は不機嫌そうに湯飲みのお茶を飲む。

「でも違つたつてことは紫様の外来人が来たという線が強くなりましたね。」

「はあ……外来人つて見境もなく幻想郷の秩序を乱すから困るわ。藍の言葉に靈夢が溜め息をつく。

「それには同意するわね。」

紫様が靈夢の言葉に賛同する。

そういうえばこの世界を一番愛しているのは紫様だつたつけ。やっぱりこいつの事件には敏感なんだろうか。

「ともかく私も動こうと思う。友人もやられたし、これ以上面倒なことになるのもごめんだしね。」

「そ、なら安心ね。」

靈夢の言葉を聞いた紫様は表情を少し緩める。

「じゃあ妖夢は返して貰うわよ?」

「ん?ああ、いいわよ。もう用は無いし。」

そして妖夢と呼ばれる銀髪少女は幽々子様の下に行き一礼する。

「ご心配をおかけして申し訳ありませんでした。」

「いいのよ、それよりも……。」

扇子で少し隠しているようだったが、幽々子様はいつになく真剣な表情をして言った。

「辻斬り、妖夢も探して捕らえてきて頂戴。」

「辻斬り……ですか？」

「そう、このまま野放しにしておくと人里にまで影響が及ぶわ。私としても人の惨殺風景は見たくないしね。」

「何人も惨殺となると辻斬りというより殺人鬼だけね。」

魅歌様も事の深刻さを理解してきたためか真剣な眼をしている。

「承知しました幽々子様。この魂魄 妖夢が辻斬りを捕らえてみせます！」

妖夢は意氣盛んに答えた。

……ここは私も出るべきた。いつも親切にしてくれる人里の皆さんを危険に晒したくないし、それに入手が多いことに越したことはない。

「魅歌様、私も「待つて。」

行きます。と言おうとするのを魅歌様が遮る。

「このみんは人里に戻りなさい。」

「人里に？」

「里の人達を護るの。」

その魅歌様の言葉を聞いてか紫様が

「なら藍と橙も人里の警護にあたらせるわ。許斐一人では大変そうだし、人員が多いことに越したことはないわ。」

「紫……ありがと。」

魅歌様は紫様に対し笑顔を見せる。

「笑うのは辻斬りに勝つた時よ。」

「ええ、なら始めましょうか？辻斬り退治。」 魅歌様の言葉を聞き、その場にいる一同は心を一つにし、博麗神社を後にしたのだった。

人里に着くと人々はもう寝る準備を整えていた。

ただ、葵さんの居酒屋や他の居酒屋ではまだ終わりを見せない宴をやつしているだろう。

今のところ人里の警備は私しかいない。

藍さんは橙と呼ばれる藍さんの式を呼びに行くとかで一度マヨヒガに帰っている。

一応念のために里の警備をしているのだが、私としては人里に来てほしくない。

相手は外来人。人里に置けるルールも知らないだろう。

今は一人だから里を西へ東へと目を光らせているのだが、もう里の中に侵入しているのならば非常に厄介である。

もしそうなった場合は私は下手に戦えない。

里の人々に変わらない明日を迎えるために。

そういうことを考えていると人里の中央で藍さん、涙、そして猫耳のついた少女と合流した。

「涙？どうしてここにいるの？」

「神様に頼りました！事情は神様の方から聞いていますっ！！」

元気に敬礼をしながら答える涙。

きつと魅歌様が気を利かせてくれたのだろう。

そして私は猫耳の少女へと視線を向ける。

猫耳の少女と視線が合うや否や猫耳の少女は藍さんの後ろに隠れてしまう。

「ああ、この子は橙と言つてな、私の式だ。ほら橙、挨拶しなさい。

「よ、よろしくお願ひしますっー！」

と言つて一礼する。

緊張のためか声が裏返つたようだが気にしないでおく。

「よろしくね、橙ちゃん。」

「よろしくお願ひしますつーーー。」

私と涙も挨拶。

挨拶が済むと藍さんは配置を決めた。

藍さんが北。涙が南。橙ちゃんが西。そして私が東だ。

「一人で大丈夫なのか？橙。」

「で、出来ます！私も誇り高き藍様の式なんですからーーー。」

「よろしい。」

藍さんが橙ちゃんの頭を撫でてあげた後、橙ちゃんは西くと向かつた。

私と涙もそれぞれ東、南へと向かった。

崩天歌ノ五『月夜の下で』

月は今宵も暗い人里を照らし続けていた。
東にある人里の門の上空で警備を続けていた私はふと夜空を見上げていた。

この空は神界を隔てていると聞く。
つまりはこの空を斬るか割るかすれば天門を使わずとも神界と地上が繋がる事になる。

ただ、この空を斬るか割るなんて荒業をする神界の住人は100年以上も生きた私でも一回しか聞いた事がない。
ましてやそんな事をすれば重罪だ。確かに神界の掟の中にそのような旨があった。

そして実際に空を斬つた天使は神界永久追放と神界で得た力・权限を全て神様に奪われた。

今その天使の力は魅歌様の中にあると思われる。
いつだかその力を魅歌様が使っていた。もちろん空を斬る為ではない。

そんな事を考えていると私の目に一人の少女が仰向けに倒れていた。

服はボロボロで頭や脚や腕には包帯を巻いており、白髪の長い髪が月光によつて輝いていた。

私は地上に降り立ち、その少女を起こす。

「大丈夫ですか！？」

私が声を掛けると、少女は力無く瞼を開けた。

そして青い瞳が私を見つめる。

「つ……辻斬りが……私を……追いかけてきて……。」

「辻斬り！？」

私はその言葉を聞き、私の体中に戦慄が走る。

私は静かに少女の体を起こした。

「立てますか？」

「は、はい……なんとか……。」

よつぽど逃げ回っていたのだろうか少女はなんとか立つことに成功する。

「住んでいる所は？」

「分かりません。」

「分かりません……かあ……」

私は頭を抱える。

ふと私の頭の中にこんな言葉が浮かんできた。

『外来人』と『白髪』。まさか……

そう思つた時には遅かった。

「感情とは顔に出るものですね、天使さん。」

いつの間にか少女が私の背後に立つていた。

「ツ…………！？」

私は声にならない程の痛みを胸からお腹にかけて感じていた。

「辻斬り…………！」

「ご名答。」

白髪の少女は笑顔でしかし残酷な笑みで私を見ている。

「その手…………どういう事なの…………」

「ああ…………この手のことですか？」

少女は刀の刃を模した右手を見る。

「便利でしょう？私は人間じゃないの…………。」

「じゃあなによ。」

「九十九神。刀のね。」

九十九神。古くなつた物や生き物などに宿る神や靈魂…………これはまた厄介な敵だ。

生け捕り…………出来るだろうか。

そして私は指をパチンと鳴らすと地面に亜空間が開き、そこから私の武器である大鎌が出てきた。

「それでこの私を倒すというの？」

「倒さない……生け捕りにする。」

私は大鎌の柄をしつかりと両手で握った。

「不快だわあ…………。」

それだけ言うと少女は動きだした。

今度の攻撃は空気を切る音と少女の気配でなんとか防ぐ。

そしてしばらく少女の右手の刃と私の大鎌の柄での鎧ぜり合いが続いた。

「…………その程度？」

「ちいっ！！」

私は挑発されたが、なんとか怒りを抑える。

そして冷静に少女の体を狙うとそれを振るう。

しかし少女は右手の刃で攻撃を受け流し、そのまま私の懷へと入ると私にもう一太刀喰らわせた。

「つづ…………！」

私はなんとか痛みを堪えたが少女の鋭い蹴りで私はいとも簡単に吹っ飛ばされた。

「私はねえ……九十九神でもとおっても強くてとおっても偉ーいの。だからどこぞの神に仕えている天使なんかに私を生け捕りにするなんて無理、無謀よ。」

少女はケタケタ笑いながら不様に倒れている私を罵倒する。

「こうなつたらしかたないか…………。」

「無理？…………いいえ、出来るわ。」

「そう…………そんな不様な戦い方でねえ…………。」

少女は油断している。これなら…………。

そして私は全神経を集中させる。

「不様？…………あなたもよ？」

「悪いけど、どうみても私の方が…………！？」

すると刃であつた少女の右手が元に戻る。

やつと氣付いたか。

私の能力である《干渉する程度の能力》に。

この能力は相手の体内に私の力を送り込み、相手の魔力、妖力、そして神力の源を短時間断つことが出来る。

問題としては私も天使としての力を短時間使えない。

つまりは身体能力だけで戦う事になる。

私は大鎌を構えて少女に向かつて横に振るつた。

「へえ……中々厄介な力ねえ…………。」

少女は跳んで避けた。

私は一旦間合いをとるために交代した。

私は使う武器が大鎌故か近距離よりも中距離の方が戦いやすいのである。

とここで少女が着地すると、素早く私に向かつてきた。

私はそれを迎え撃ちに行く。

すると既に相手の力が戻っていたのか右手は刃に戻されていた。

「さすがに早いか。」

「言つたでしょ?……私はとおつても強いつてねえっ!!」

すると少女は力付くで私を押し切つた。

「しまつ…………」

「甘かつたねえ。」

ドスツ

私は腹部にとても熱いものを感じていた。

「あ…………が…………。」

「あなたは所詮天使よ。まあ、死にはしないからせいぜい苦しみなさい。」

そして少女は私の腹部から右手の刃を抜く。

すると私の腹部から悍ましい量の血が出る。

正直もう倒れそうだったが、まだ堪えている。

「まだもがくの?」

「うう…………はあ…………人里には…………はあ…………行かせないつ…………!!」

私は気力を振り絞つて大鎌を振るつた。

しかしそれは空を切るだけで私はそのまま倒れてしまった。

「よく頑張ったわ、天使さん？このまま抱きしめてあげたいほど愛おしい姿よ？今あなたは。」

少女は座り込んで私の顔を覗き込む。

少女は無垢でそして残酷だった。

「あなた……気に入ったわ……名前を教えて。」「

「はあ……はあ……。」

私は痛みを堪えるのに必死であった。

「教えてくれないと……非道いよ？」

少女は右手の刃の切つ先を私の首筋に当てる。

冷たい刃が私の首に少しづつ刺さる。

「ひつ……。」

私は恐怖を感じた。

怖かつた、ひたすら。

「仕方ないなあ……なら声が上がるよつに痛くするね？」

少女が私の首筋に刃を少しづつ入れ始めている時であった。

「そこまでよ。」

「だあれ？……」

私は首筋に刃を刺されているため無闇に動かせないのだが、この声は……！

「あ…………おい…………さん？」

首筋から刃が抜かれたため、私は葵さんの名を口にする。

「もう大丈夫よ許斐ちゃん。私が来たからには。」

葵さんの長い太刀が既に抜かれている。

「フフフ……あなたは諭しませてくれて？」

「なめた口を……。」

そしてそのまま交戦に入るのであった。

崩天歌ノ五『月夜の下で』（後書き）

はてさて遅れて投稿完了しましたっ！

そのため今日は一話分投稿しております。

また誤字・脱字・感想等はコメントにて受け付けております。

これからも崩天歌をよろしくお願いしますっ！

崩天歌ノ六『辻斬りの終末』

葵さんと九十九神の少女……その戦いはまさに一進一退の攻防であった。

葵さんが攻めていると思いきや少女がすぐに切り返し、逆に少女が切り返してくるならば葵さんが切り返していた。

ふと少女の方を見ると、少女の顔から笑みが消えていた。

「そんな長いだけの太刀で……」

「そんな短い刃で……」

「勝てると思つているの！？」

今度は鎧ぜり合いが始まる。

「許斐ちゃんの敵は取らせてもらう。」

「そう……あの子はこのみといつの……悪いけど氣に入つたものは貰う主義でねえっ！！」

少女が力付くで行こうとしていたが……

「力押し……なめているのかしら？」

葵さんは逆にその力押しを受け流して足を引っ掛けた。

そして少女は地面に勢いよく転んだ。

「冷静さを失つたわね……それが敗因よ。」

葵さんが刀の切つ先を少女の首筋に当てる。

「ふつ…………」

「ふ？」

「フフフフフフフフフ……アッハハハハハハハハハッ！！」

「何が可笑しくて？」

葵さんは身構える。

私もなんとか大鎌を杖にして立ち上がつた。

「凄い……凄いよ。私をここまで追い詰めたのは貴方だけよ……？」

「そう。」

喜ぶ事もなく葵さんは短く答える。

しかし少女がここまで追い詰められても笑つてているのは何故だろうか。

「なら……本気、ださなきやね?」

「ツー?」

そう言つと少女は葵さんの刀を弾き、そのまま消えた。

「後ろつ……!」

私がそう叫ぶ。

そのお陰か葵さんはなんとか防いだ。

今度は右手だけでなく左手にも刃を模していた。

それだけではなく、少女の背後には何十本もの刀を浮かべていた。

「何よ……」れ……。」

「驚いた?」

葵さんの驚愕の顔を余所に少女は再び笑みを浮かべた。

「全部私が拾つてきた私のかわいいこちゃんよ。」

「か、かわいいこちゃん!？」

「そう。でも許斐ちゃんの方が素敵だけどね?」

そう言つて私の方を見た。

どういうつもりなのだろうか…………?

「まったく……人間共が廃刀令やらをださなければこの子達は捨てられずに済んだのに……」

少女はどこか悲しげな表情をしながら話す。

「貴方は捨てなかつたみたいね……その刀、きっと喜んでいるわ。」

「喜ぶねえ……」

そう言つて葵さんは刀を見つめた。

「フフッ……それじゃあ刀もろとも眠つてもうらうわ……」

「それは遠慮しておくわ。」

「遠慮しないでよ……せつかくの計らいなんだからさあつ……」

「そう言つて少女は右手を前にだす。

すると背後の刀が一斉に葵さんに襲い掛かる。

しかし葵さんはそのまま刀に向かっていく。

「葵さん！？」

「馬鹿ね……！」

そして刀は葵さんを貫いていなかつた。葵さんはそこにいなかつた。

「なにつ！？」

少女は気付いていないだろ？が、横から見ていた私には見えていた。

「スキマ…………？」

そう呟いた瞬間に少女は切り裂かれていた。

「へ…………？」

少女は訳が分からぬまま倒れた。

「ふう…………。」

葵さんは一息つき、私の所へ来る。

「なつ…………何があつ！－この私が！－この私があつ－！」

少女は斬られた事に対して驚きを隠せないでいるようだ。それもそのはずだ。なぜなら……

「この子が辻斬りか。」

紫様がスキマから登場して少女の前に立つ。

「お…………お前は！？」

「ハ雲 紫…………ただのスキマ妖怪よ。」

ただのスキマ妖怪ではないのだが……と私は心中で突っ込む。

「悪いけどこれ以上被害を出すわけには行かなかつたの。」

「…………だから私を？」

「そうよ、私の友人もやつたそつじやない？」

聞いたような声がすると思いきやいつの来たのか靈夢が少女の前に立つていた。

「靈夢…………もう退治は終わっているわ。」

「分かつていてるわ。」

そして靈夢は少女を見下すようにして言った。

「貴方には悪いけど、この幻想郷の均衡を保つのは私の役目よ。これ以上人を斬るつもりなら九十九神と言えど容赦はしない。」
「くつ…………」

少女はこの人数差には勝てないと判断したのが大人しく体を起した。

「分かつたよ。もう人斬りは止めるよ。」

「そう。それならいいわ。」

靈夢はそれだけ言うと紫様と少し打ち合わせした後に飛んでいった。

人斬りの犯人が觀念したからだろうか？

「さて、どうしようかしらねえ…………？」

「わ、私をどうするつもりっ！？」

「そうねえ…………」

紫様は少し考える素振りをする。

「好きにするといいわ。ただし斬った人には謝りなさい。」

「わ…………分かつた。」

紫様は頷くと私達の方へと歩いてくる。

「これで解決……ね。」

「ありがとね紫。」

葵さんは刀を鞘に収めて言った。

でも紫様のことだ、もしかしたら…………

「でも紫様はいつからいたんですか？」

「ん？ 許斐があの子と戦つてからよ。」「ん？ 許斐があの子と戦つてからよ。」「やつぱり…………」

私は溜め息をついでしまう。

「危なつかしいたらありやしないわ。」「なら助けて下さいよ！！」

「それは葵が来るのを分かつていたからよ。私はあまり戦闘はしたくないしね。」

「うぐつ…………」

紫様らしい答えであった。

「じゃあ、あの子は頼むわよ。」

「ちょっと……どういう事ですか！？」

しかし私の抗議は虚しく月夜に響くだけだった。

「どうしましょう。」

「うーん、どうしましょうかねえ？」

葵さんも困った顔をしている。

「許斐……」

ふと後ろから声が聞こえた。

「え？ あ、あの……」

「刃 霧華よ。霧華って呼んで？」

「じゃあ霧華さん。どうしたんですか？」

「私は 許斐についていく。」

「へつ？ええつ……えええええええええつ……！」

驚愕の提案であった。

「で、でも住む所は。」

「別にいいわよ。」

「魅歌様！？」

いつの間にか魅歌様、幽々子様、妖夢の三人がいた。

「でも神界には神は一人のはず……！」

「客人としてなら問題ないわ。」

「で、でも……」

「見捨てるの？」

その魅歌様の言葉に私は反論できなかつた。

「じゃあ……」

「いらっしゃいな、我が慈母神の世界に。」

「あ、ありがとう……やつたよ、許斐！……」

何故か霧華さんは私に抱き着いてきた。

「き、霧華さん！？」

「霧華でいいの？……」

「じゃあ霧華つーとりあえず離れて……」

私の傷口はさうに開いていた。

「あらあら……」

「羨ま……じゃない……」のみんから離れなさい。傷口を開いているから！」

「フフッ……お盛んなのね。」

「盛ん、とは言い切れないようですがどね。」

葵さん、魅歌様、幽々子様、妖夢が各自そんなことを口にした。

「見てないで助けて下さあい！……」

辻斬り事件はこうして幕を下ろしたのだが、まだ事件は全て終わってはいないのであった。

余談だが、私が霧華から解放されたのは私が失血で倒れた後だといつ。

崩天歌キャラ紹介（前書き）

キャラ紹介です。

作中では能力の描写が書かれていないキャラの分もありますが気にしないかたはこのまま進んで下さい。

崩天歌キャラ紹介

【天道 許斐】

(てんどう このみ)

- ・種族：天使
- ・年齢：約1800歳
- ・能力：「他人に干渉する程度の能力」

『補足』

この物語の主人公。

長い黒髪に茶色の瞳を持つ。外見は17歳前後。

魅歌に仕える天使の一人で位階の低い天使を指導出来る天使班長。敬語が多いが、後輩や気を許した同じ境遇相手なら普通に話す。とある事情により他の古参の天使からは敬遠されがちだが同じ班の天使からの人望は厚い。

魅歌は許斐を自慢としており、許斐は魅歌を信頼している。だが魅歌には振り回されること多々あり。

武器は大鎌。

能力は対象の能力を上げたり下げたり出来る。また、相手に精神攻撃や相手の体を乗っ取るなど恐ろしい力を秘めている（魅歌談）が、本人はまだ力の制御に手こずっている模様。【桃園 涼】

（ももぞの かいり）

- ・種族：天使

・年齢：約150歳

・能力：「士気を操る程度の能力」

『補足』

許斐と同じ班の新人（齢約150歳であるが……）天使。

黒い短髪と紺色の瞳を持ち、また常にホイッスルを所持している。外見だけで見るなら14歳前後か。

許斐からは元気で明るい真面目な子、そして魅歌からは元気過ぎ

のドジっ子と評されている。

武器は持っていない。

能力については敵、味方の士気を上げたり下げたりする能力。
ちなみにこの能力はホイッスルを吹かないと発動できない。

【出雲 魅歌】

(いづも みか)

- ・種族：慈母神
- ・年齢：約1800歳
- ・能力：癒す程度の能力

《補足》

許斐、狸の仕える神様であり約1000年に渡つて前代イザナミの信仰を守ってきた。

長い赤髪と赤い瞳を持つ。外見でいうなら12歳前後で狸よりも身長は低い。

本人に対しての信仰が無くともイザナミに対しての信仰があれば神力は持続出来る。

幻想郷に来るまでは職務に没頭していたため幻想郷に来てからは遊びまくっている。ただし勿論のこと職務はこなしている。

能力についてはあらゆる傷（物理的、精神的共に）を癒す能力。
その効果は絶大で斬り落とされた腕もくつつけて魅歌が能力を使えば半天で治ってしまうほどである。

【葵 畏羽】

(あおい くれは)

- ・種族：亡靈
- ・年齢：約350歳（享年27歳）
- ・能力：ありとあらゆるものを見つけて魅歌が能力を使える程度の能力

《補足》

『居酒屋 武士道』と呼ばれる居酒屋の店主。
長い黒髪と赤い瞳を特徴とする氣前のいい人。

戦国時代に生まれ、病気で死んだと言われているが、真意は不明。

刃渡り5尺（約151・5cm）にもなる長刀を愛刀としている。能力はありとあらゆるものを見封する程度の能力で、彼女が亡靈でありながら居酒屋を経営できているのはこの能力のお陰だという。ただしこの能力は従業員や他にも封印しているものがあるためか少々弱くなっている。

【刃 霧華】

（やいば きりか）

- ・種族：刀の九十九神
- ・年齢：約130歳
- ・能力：物を取り込む程度の能力

『補足』

刀の九十九神。

姿は16歳前後で白髪に青い瞳を持つ。

本人の言葉通り九十九神の中でも高位にあたる。

許斐に一目惚れし、許斐を傷つけようとする者、むしろ敵として立ちはだかる者は容赦しない。

ちなみに許斐以外にはあまり興味を示さないため許斐には心配がられているが、本人は気にしてない。

能力については物を取り込む、つまりは刀だろうが桶だろうが木材だろうが自分の力として取り込むことが出来る。

ただ本人が刀だけを愛しているためか刀しか取り込まない。

崩天歌ノ七『事件の事後処理』

辻斬り事件は終わってはいない。

翌日、霧華は被害者の人達へ謝罪をしなければならなかつた。
そして私は監視役として同行している。

ちなみにあの事件が収束した後、涙は通常の職務に戻り、藍さんは橙ちゃんと共に紫様の下へと戻つて行つた。

「ところで霧華？」

「なに？ 許斐の言つことなら何でも聞くけど？」

「それじゃあまずは腕を組むのをやめようか。私、まだ傷が治つていないんだからさ。」

そう、霧華は昨日の一件以来ずっと私の後について來た。

ちなみに怪我の看病も霧華がやつていたそうだ。

魅歌様はその時の様子を見ていたそうだが、それを言つのをかたくなに拒み続けた。後で霧華本人に問いただすとしよう。

さて最初に着いたのは魔法の森である。

道中では動くキノコや白黒の魔法使いなどにすれ違つた。
そして着きましたのはアリス邸。

アリス・マーガトロイドに関しては、私は何度も会つているため問題ないだろう。

ただ霧華がアリスに許されるか、はたまた霧華が謝らないか。
私の中ではその二つの考えが入り混じつていた。

「許斐？ どうしたの？ 早く入ろ？」

「あ、ああ…… そうだね。」

私はいつの間にか長考していたらしい。

私がドアをノックすると、家から出でてきたのはアリスではなく紅白の巫女さんだった。

「博麗 靈夢……？」

「そうよ。いては駄目かしら？」

「いや、それは構いません。アリスはいますか？」

「アリスなら起きてるわよ。なに？お見舞い？」

「それも兼ねて。本来はこの子に謝罪をさせるのが目的ですが。」

「ふーん、とりあえず入りなさい。」

私と霧華はアリス邸へと入る。

人形達は主が寝込んでいるせいか大人しい。

唯一動いているのは上海人形だけだった。

私はアリスのベッドの前にあつた椅子に座る。

「あら、許斐じゃない。どうしたの？」

「お見舞い。それと謝罪。」

「謝罪？なんでアンタが……つてまさかソイツを連れて來たの？」

アリスが霧華を見て驚いている。

さすがに友人が加害者を引き連れてきたらそれは驚くにきまつている。

「そ、アリスも分かつているだろ？けど辻斬りはこの霧華つて九十九神。ほら、謝りなよ。」

私は霧華の方を向く。

霧華はアリスの前に立つと

「ごめんなさい。」

と一言。

「おお、霧華が謝った。」

あとはアリスが霧華を許し……

「大丈夫よ、傷は浅かつたし。」

以外にあつさりと済んでしまった。

「へえ？」

「何よアンタ、ここの九十九神が謝ったんだから驚くことはないでしょ？」

「靈夢が驚く私を尻目にそう言って紅茶を飲む。

巫女が紅茶が飲むといつ光景は新鮮だつた。

それはさておき

「アリスは斬られたんでしょう？ならそんなにあつさり許していいの？」

「いや、そんなに深くないわよ。パチュリーの作った薬で少しほ楽になつたわ。」

「ああ、紅魔館の。」

私は紅魔館の地下図書館にいる紫の魔女を思い浮かべた。
そういえば紅魔館にも行かなければならない。

霧華が言つには紅魔館に侵入して、妖精メイドを斬つてきたりしい。

ちなみに主である吸血鬼のレミリア・スカーレットとも交戦したらしいが押されっぱなしで、しかもメイド長が援護に来たから逃げ出したところ。

紅魔館は最後にしよう。それと身を護る用意もしておかないと。
「んで見舞いの品は？」

靈夢が紅茶を注ぎながら言つてきた。

「こら靈夢、見舞いの品をせびるな。そして紅茶を淹れながら見舞いの品を食べるな。」

「どうせ食べないでしょ？なら早めに食べておかない？」

靈夢は見舞いの品であろうケーキを食べている。

それにしても、この巫女は西洋の菓子が好きなのか？

「たく……で結局持つてきているの？」

「見舞いの品は無いわ。けど……」

私はアリスの額に手を当てて体内に干渉し、怪我の痛みを和らげるよう力送る。

「ん、まあこんなもんよね。」

私は額から手を離す。

すると靈夢が不思議そうに聞いてきた。

「なにしたのよ。」

「私の能力使って怪我の痛みを和らげるよう促しました。」「怪我を治すのではなくて？」

「それは神様の能力ですか。」

私は苦笑する。

「別に治さなくても気持ちが伝わってくるからそれでもいいわ、ありがと。」

「いえいえ。」

「ここで私は椅子から立つ。」

「あら？ もう行くの？」

「他にも行かなければならない所があつてね。」

「そう。道中気をつけてね。」

「アリスこそ無理しないでよ？」

私は霧華を促してアリス邸を後にした。

次の目的地は永遠亭。

道中の迷いの竹林は案内人として妹紅を選択。

久しぶりの再開に妹紅は嬉しそうであつた。

ただ、霧華はどういう訳か道中で妹紅を睨みつけていた。できれば私以外にも目を向けた方がいいのだが。

「んじゃ、いつでも私なら案内するから。」

「ありがとね妹紅。」

私は妹紅を見送った。

そして私達は永遠亭の玄関の前に立つ。

すると玄関から兎が一匹出てきた。

「やあやあ天使さん、『機嫌いかがかね？』

「てゐ！？」

そこにいたのは因幡 てゐだつた。

私は一度くらい永遠亭に来ているので、てゐとは面識があつた。ついでにいうと私はてゐの仕掛けた罠に一度引っ掛かっている。

「また罠でも仕掛けにいくの？」

「『名答！許斐はどうしたの？』

「今日は永琳先生に用があつてきたの。」

「師匠に？なに？急患なの？」

「ほら、例の辻斬り事件について。」「あー……その話題なら出せない方が身のためだよ。師匠は現在進行系で氣が立つちゃってるし。

「解決したから報告に来たの。」

「そ、なら師匠と鈴仙には罠のこと黙つててね。あ、今入つても大丈夫だから。」

と言つて元気に外に飛び出す。

罠を仕掛けるとかしていいが、あれでも私より年上だから困る。

「霧華、永琳先生は気が立つちゃっているから言動には気をつけね。」

「はーい。」

霧華は間の延びた返事を私に返す。

いくら霧華が謝りにきたとはいえ永琳先生は気が立つている。そのことに一抹の不安を感じつつも永遠亭に入つていった。

崩天歌ノハ『永遠亭と事件』（前書き）

のんびりしていたら予想以上にかかつてしまつた……お待たせしまつて申し訳ありませんでした。

崩天歌ノハ『永遠亭と事件』

現在永遠亭にいるわけだが、どういう訳か永琳先生が見当たらな
い。

まさかてゐに騙されたか?と思つたのだが、それは考えるだけで
無駄だと私は結論付けた。

玄関にもどると永琳先生ではなくもう一匹の兎を見つけた。
手には買物袋を持つて来ているので買い物から帰ってきたという
ところか。

「おかれり鈴仙。」

「あ、久しぶり!今日はどうしたの?」

私はてゐと面識あれば鈴仙とも面識ありだ。

「永琳先生を探しているんだけど……」

「師匠? 師匠なら姫様の所じゃない?」

それは盲点だった。

「そつか、なら輝夜の所に行つてみるよ。」

「話題には気をつけてね。下手するといくら師匠でも襲い掛かつて
くるかもしねいか。」

私は質問に手を振つて答える。

話題に気をつけろ、ねえ……。

私と霧華は輝夜の部屋の襖の前に立つていた。

「霧華、私に任せておいて。永琳先生と面識ある私なら下手はうた
ない。」

それに永遠亭の姫様とは段幕¹こじをやりあつて、そして「その呼

び方は……入つてもいいわ。」「では失礼します。」

私と霧華は襖を開けて中へとお邪魔する。

中には永琳先生、そして表情が固まっている輝夜がいた。

「どうしたの？今日も診療の用事で？」

「いえ、辻斬り事件のこと……」

すると霧華は即座に倒されて永琳先生に弓矢を構えられる。

「ありがとね許斐さん。犯人を私の前に連れ出してくれるなんて。」

「……どうして分かつたんです？」

「大体の算段は私もついてきていたわ。そして私はさつき特定出来たの。この外来人だつて。」

どうやら本気で辻斬り事件に関して怒りを覚えていいるらしい。

私は弓矢を構える永琳先生を制す。「別に霧華……この子を殺す

為にここに連れてきた訳ではないんですね。」

「じゃあ、何をしに？答え次第では頭に風穴が空くわよ。」

永琳先生は私に弓矢を向けた。

「謝罪です。」

「謝罪？」

「この子は魅歌様、紫様、その他葵さん達の力を借りて懲らしめました。もう辻斬りまがいなことはしないとこの子は言っています。」

永琳先生は厳しい目つきで霧華を睨む。

「まあいいわ。過ぎたことは仕方ない。」

「しかし何故そんなに憤慨を？」

「辻斬りのせいで建物と鬼が十四、作り置きしていた薬が七瓶に鈴仙と姫様が傷付いたわ。」

「輝夜まで……？」

「ええ、私が永遠亭を離れている間に起こったのよ。」

「ひどい偶然ですね。」

しかしながら霧華は永遠亭に辿りつけたのが疑問であった。

「ただなぜ辿りつけたのかしらね？その子。」 ちゅうじ同じ考え方をしていたのか永琳先生が霧華へと弓矢を向ける。

「兎……」

「兎？」

「さつき出会つた鈴仙つていう兎よ……あの子が案内してくれた。心做しか霧華の表情が強張つていた。

永琳先生は怒るととんでもなく怖いと人里でよく会つ鈴仙から聞いたことがある。

事実輝夜が霧華と同じような表情をしているからだ。

「本当に？」

「は、はい。私はあの兎をつけていたの。そしたらここに着いて…

…」

「なるほど……」

と何故か永琳先生は弓矢を降ろした。

「じゃあ一つだけ聞かせてもらひけど……」

「はい。」

「辻斬りしていた時の記憶は残つてる？」

私は意表をつかれた顔になつてしまつた。

私達は霧華の証言を元にこうして廻つてている。

覚えているに決まつて……

「うつすらとしか覚えていない。」

「ええっ！…！」

私は驚きを隠せず、つい声をあげてしまう。

「本当よ許斐……私が覚えているのは『人形と人間』『兎と竹林』

『紅とメイド』だもの……」

たしかに私はその言葉を元に特定した。
まさかそれしか覚えていないとは……

「……どうやらこの子は灰色ね。」

永琳先生は落胆する。

「実行犯はその子だけれどもどうやら裏で操る奴がいるよつね。」

「黒幕か…………」

事件は解決していなかつた。

つい私も溜め息を漏らす。

「永琳先生はどこまで田星をつけてなんですか?」

「犯人がその子までよ。だけど黒幕の出現によつて狂つたわ。まだ事件は終わつてはいない。」

どうしたものかと私と永琳先生は物思いに耽る。

霧華は操られていた。

しかこれまでの言動からして何処までが操られていたのだろうか?

「霧華、どこまでなら思い出せるの?」

「…………。」

霧華は沈黙していた。

「霧華?」

「そ、その…………。」

と私に耳に顔を近づけて耳打ちしてきた。

「一、許斐を刺した時よ……その…………それから許斐に一日惚れして……。」

何故あの時に一日惚れしたのかが解せない。

「どうしたの? こそそ話して。」

「いえ、なんでも。」

永琳先生はしばらく私の顔色を窺つていたが、しばらくすると矢を持つて立ち上がつた。

「もう一度私は辻斬り事件を調べる。許斐も魅歌つてのやハ雲に伝えておいて頂戴。」

「分かりました。」

私がそう言つと、永琳先生は輝夜の部屋を出て行つた。
私は輝夜の方を向く。

「…………何をボーッとしているの。」

「え、えーりんが…………あんなに怒りを顕わにするから…………」

「ああ、それで。」

私は立ち上がりて輝夜の隣に座る。

「……で、斬られたのは本当?..」

「え、ええ。いつもの段幕『じつこかと思つたら急に襲つて来るんだもの。驚いちゃつたわ。」

「ふーん、珍しいわね。輝夜が斬られるなんて。」

実は輝夜とは段幕『じつこかと思つたら急に襲つて来るんだものが全敗している。

だから輝夜の強さは分かつていたのだが……

「私が最強じゃないんだから……まあ、かすり傷だつたからえーりんに薬を塗つて治したわ。」

「いくらなんでも回復力ありすぎね。」

かく言つ私も人のことを言えないのだが……。

「どうせなら今からでも段幕『じつこかと思つたら急に襲つて来るんだ私が余裕だけど。」

「私の方が無理ね。」

斬られてもなお余裕な姫様なのであった。

崩天歌ノ九『紅魔館』

私は霧華を連れて永遠亭を出た。
帰り道は鈴仙に送つてもらつた。

今はその鈴仙にお礼を言い別れた後、紅魔館を目指していた。
気づけば口は沈みかけていた、永遠亭に長居していたようだ。
霧華はと言えば、永琳先生との一件ですっかり疲弊している様子
だった。

「許斐～本当に行くの～？」

「行くに決まつていいでしょ？事件が解決してないんだから。」
別段急ぎという訳でもないが謝罪と聞き込みは出来るだけ早く済
ませたい。

ましてや相手が吸血鬼ならなおさら昼間に行つわけにはいかない
のだ。

そして霧の湖と呼ばれる湖に着く頃にはすでに夜になつていた。
今は霧は発生しておらず、紅魔館はすぐに見つけることが出来た。
霧華はもちろんだが、紅魔館は私にとつてもあまりいい思い出が
ない。

レミリアには弄ばれ、言つことを聞かなければメイド長のナイフ
が頬をかすめ、拳げ句の果てにはレミリアの妹であるフランと遊び
と言う名の殺し合いをさせられたのだった。

どうも私は向こう側に気に入られたらしい。
私にとつては悩みの種になるのだが……

そうこうしている内に紅魔館の門の前に降り立つていた。
門番の美鈴さんは相も変わらず目を閉じたままである。

「美鈴さん、起きないと咲夜さんに刺されますよ。」

私は、まるで春告精のように私は美鈴さんに呼び掛けた。
それでも起きないので私は続ける。

「門番クビになりますよ～それとも咲夜さんに刺されたいんですか

「？マゾですか～？」

まだ起きる気配を見せない、それなら……

「咲夜さん～ん！？美鈴さんがまた寝ているんですけど～～！？」

と大声で叫ぶ。

すると美鈴さんが目を覚まし、慌てて私の口を塞いだ。

「あわわわっ！呼んじやダメですよおつ～～！」

「ん～～ん～～！」

私は必死にもがく。

息が……出来ない。

「ちょ～何をしている～～！」

霧華が助けに入った。

私は美鈴さんの拘束から解放される。

「許斐さん……あの人だけは呼ばないで下さい。」

「もう叫んじやったんですけど～～。」

つい私は乾いた笑みを浮かべる。

聞こえたかは貞かではないが、いや、貞かではなかつたようだ。
美鈴さんにとっては来て欲しくなかつた人がいつの間にか美鈴さん
の背後にいた。

しかも不気味なほど笑みを浮かべて。

「今ちょうど貴方の所に行こうとしていたのよ？」

「ひいっ～！咲夜さんっ～！」

まるで妖怪に声をかけられた人間のような驚き方をする。
種族でいえば逆なのだが……

「まったく……せつかくの客人を目の前に寝ている門番とは前代未

聞よ。

「～～ごめんなさい～～！」

「……次の給与査定、楽しみにすることね。」

おお、ついに肉体的な罰ではなく給料減額の罰となつてしまつた。
美鈴さんも真面目に働いていれば……

「さて、お客様は何用で？」

さすがに客人を前にこれ以上の罰はないか……

「レミリアさんにお話があるんです、私としては重要な。」

「重要かどうかはこちらで判断いたしますわ。とはいせつかく来てくださったのですからどうぞこちらへ……」

と言われてメイド長に誘導される私。

霧華もついて来ようとしたが止められた。

「先日はどうも暴れてもらいましたね？」

「…………」

咲夜さんが冷ややか視線を霧華に向ける。

霧華は無言だった。

「流石にお嬢様に刃向かつた輩を紅魔館に入れるわけにはいきませんわ。」

「いえ、今日はこの子も強く関係する話で……」

「それなら致し方ないですわね。」

咲夜さんは仕方なさげに霧華も中に入るよつに促す。そして私達は紅魔館に入つていつた。

さて、紅魔館のあとはどうじよつ……

とりあえず魅歌様とお話をしなければだし、紫様や幽々子様にも話をしなければならない……

「はあ…………」

つい溜め息をついてしまつ。

それは用事が山ほどあることではなく、休暇だといつのに仕事時と同じように考えを張り巡らしていることに対してだ。状況が状況なのだから仕方ないのだが……

そういう考えていくうちに私達はレミリアさんの部屋の前に立つ

た。

咲夜さんが部屋のドアをノックする。

「お嬢様、許斐がお話をしたいそうなのですが。」

「入れなさい。」

咲夜さんはドアを開けて中へと入る。

私と霧華は咲夜さんの後に続いて入る。

そこには待ち兼ねていたような笑みを浮かべたレミリアさんがいた。

「おはよっ許斐。」

「おはよう」まだ夜になつて時間が経つていなかつたか。

「おはよう」さこます、レミリアさん。」

「で? これから食事つて時に話つて?」

「まずは紅魔館を荒らした事をこの子に謝らせに来ました。」

「「めんなさい。」

霧華は深々と頭を下げる。

それを見たレミリアさんは未だに笑みを浮かべている。

「形だけの謝罪では許さないわ、何てつたつてこの紅魔館が荒らされたんだからね。」

「じゃあ、どうすれば……?」

「一週間……」

「はい?」

「一週間紅魔館で働きなさい、許斐とその辻斬りでね。今回はそれで許してあげるわ。」

「へ? 私もですか?」

私は目を丸くした。

「当たり前よ。保護者という意味で連帯責任を負つてもいいわ。」

「いつ保護者になつたんですか! ……とは言へず私は首を縊に

振つた。

「ここで無理に断つうとしても話が進みやしないからだ。」

「フフ……素直でよろしく。」

「

レミリアさんは満足げに笑う。

「それで事件の事ですが……」

「分かっているわよ、その子が犯人じゃないんでしょう?」

「つー? ……何故それを?」

「全ては運命。私の手の中よ。」

「運命?」

そういうえばレミリアさんは『運命を操る程度の能力』を持つていたんだつけ……?

それなら話す手間が省けるか。

「なら辻斬り事件については何か情報が?」

「無い。」

見事なまでの即答であった。

そしてその言葉を聞いて私は肩を落とした。

「……ただ、仮にも九十九神を操る力にパチエが興味を持っているわ。その力がなんのか分かれれば犯人は特定しやすいんじゃない? 確かに魔術となれば特定は出来るかもしれない。」

「咲夜、案内してあげなさい。」

「かしこまりました、お嬢様。」

もちろん向かうのは地下の大図書館。

私は事件解決の希望を見つけるためにも顔を上げるのだった。

崩天歌ノ九『紅魔館』（後書き）

長かった……お待たせしてすみませんでした。
リアルが忙しい、これから楽になりそうになりそうですが……。

このような更新スピードですが今後ともよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9948x/>

東方崩天歌

2011年11月24日23時03分発行